

令和 7 年度（2025 年度）
京都市立芸術大学大学院音楽研究科修士課程入学試験問題
日本音楽研究専攻 専門語学 現代文

下の文章は、上野堅實著『尺八の歴史』（島田音楽出版）の「まえがき」の全文で、8つの段落
（(1)～(8)）から構成されています。よく読んであとの問いに答えてください。（掲載にあたって原文
を一部改変しています。）

この問題は著作権法上の関係により、出典のみ記載しています。

この問題は著作権法上の関係により、出典のみ記載しています。

この問題は著作権法上の関係により、出典のみ記載しています。

問1 傍線部(①～⑩)には、「これ」「それ」などの指示語が含まれています。それぞれの傍線部が文中で何を指しているか、簡潔に答えてください。

問2 段落(2)に「本格的な尺八にかんする通史は、現在存在していない」(波線部)とありますが、著者は、その理由をどのように考えていますか。段落(1)から段落(3)までをよく読み、著者が考える理由を、2つにまとめて説明してください。

問3 著者は、段落(4)と段落(5)において、これからとりくむべき具体的な課題を、複数あげています。どのような課題か、箇条書きにして示してください。

問4 段落(7)の二重傍線部「社会史的な観点」とは、どのようなところに目をつけることを意味していますか。段落(7)をよく読んで、説明してください。

問5 段落(1)に「神聖視する立場」(破線部)という表現があります。この立場から脱却するためにとるべき学問的手続き(あるいは手段、方法、立場)は、段落(6)に示されています。どのような学問的手続きですか。

問6 本文全体(「まえがき」)から、上野堅實著『尺八の歴史』全体がどのような本であるか、想像できると思います。その想像にもとづいて、本書『尺八の歴史』の内容や特徴を、簡単に紹介する文章を書いてください。(分量は200字以内で。)

江戸時代中期の浮世草子（当時の風俗や人情の諸相を描く娯楽性の濃い文学）作家、多田南嶺による『鎌倉諸芸袖日記』（寛保三年（一七四三）刊）は、浄瑠璃の外題『鎌倉袖日記』をふまえ、源頼朝にたいして臣下たちが代わる代わる面白いエピソードを語る、という設定で書かれた作品ですが、それぞれのエピソードでは当代（江戸時代中期）の世相が語られていて、頼朝の臣下たちがはるか遠い未来の出来事を見たこと聞いた事として語るのが作品全体のコンセプトとなっています。次の文は、その作品の四之巻の一話です。通読してあとの設問に答えなさい。

原文は長文のため所々省略しています。省略箇所は、＝で示しています。「」内、および注は出題者によるものです。

① 浄瑠璃物真似も年功のいひ立

➊ 神楽歌は、神代の古風をうたひ物にしたる物にて、＝長き御代を、いわひたる物が、一転して催馬楽となり、今様朗詠しをり萩の雅なる章韻も、かはればかはる物にて、信濃前司とかやが作りたる平家物語りにふしをつけて、望一といへる板東座頭がなまりちらして語りそめしより、ところへは喉につまるやうなるを、伝事とさだめ候けるぞやの、＝ひづみたる琵琶の撥音、ばらりん＝と是を此世のたのしみと、かなりがけに食物のある隠居もあれば、＝称名鉦はり講と名づけて、大なるたき鉦を台へかけて、クワン＝と調子にかけ、拍子をあらそふ仲間もあり。

➋ 世はさまへゝの内に、難波の北に大灘屋の入斎、あとも八右衛門といへるは年いまだ卅一二才。いつの頃よりか唐音を稽古し、よき若衆を見ては「好童子」、よき女をみては「好女子」、「さんけんのんかんがん、よんくんばんもんつんでんこんいん、ひやろにうきやらい」などいふてくらし、朝から晩まで禪寺の念経きくやうに、近所からも寝言の八右衛門と異名せらるゝほどなるに、其隣は紅屋の太郎右衛門と云て、年つもつて七十三歳。＝生れつゝて踊好にて、盆になれば白髪をぬり、若やぎ打ぞめひて、夜をあくるまで「そつこでせい、まかせてせいコレやあとなア」をしやべりありき、町の参会に出て、＝いづれも酒がしゆんで、仕舞にうたひがはじまれば、＝扇をかざして声はり上、大むかしの役者のせりふ、＝ぬけたる歯よりすかへいふて＝興をさませば、大茶屋にての参会なる故、仲居むすめ共はわらひも多せず、おもしろかるべきやうもなくて、＝「マ十年もとしが若ければ、此物まねで一座のおなご共もひたへとなびけてみせるに」といへば、茶屋の娘共が「今でもじやわいな」といふたは、たしかにきよくることばとは聞ながら、どこやらそこへろにかへつて、そのあくる日より、七味匂ひ歯みがきを買ふてきて、六七枚のこりし歯をみがき、はげはてゝなき鬢髪に床髪ゆひたのみてかけがみをかけ、＝おどりと物まねで色をとる氣にて、めつきりと金をつかひ出し、夜どまり日どまり身上不相応のおこり。

一門一家もてあつかひ、たびへ意見しても得心せず。跡つぎの養子智太郎八もこまり入て、夫婦して「金をおつかひ被成るゝ事は申ませぬが、＝おどりと物まねはやめになされて下されませい。」と、しみへとくどけば、＝踊り物まねをわびごとしければ、「しからば年より相応に浄りに致ふ」と、＝うがひしながらもかたり、是もこうじて来て、床へあがつてやつて見たい心になり、養子智にかくし、＝銀三百目出して、座摩の社内である稽古浄るりへ毎日へかよひ＝けるを、養子智とかく迷惑がり、となりの隠居入斎老へ、「おまへ様は御実体なおやご様で、さぞ御子息様の安堵なさるゝでござりませう」といへば、「イヤへ苦は色かゆるでござる。手まへはまた倅が実体すぎて商ひがうすく、代々の得意ものゝてめいわくいたす。其子細と申は、手まへは＝薪問屋ゆへ、土佐阿波くまの方々より船がつゝて、荷主と申すは船人衆でござる。＝むつかしいあしらいいたせば、いたみいつて返りうがきうくつになる故、＝手まえの家では、むかしから茶湯ばなし歌ばなし、さけの上でも小うたひ、かたく法度にいたしおゐて、もしや肴がいれば浄瑠璃の道行かおどりとどきでなければまいらず。そこもとのおや御太郎右衛門殿をこちの養子に致せば、大ぶん客のつく事でござるに、きのどくなは倅八右衛門。すこしばかり論語のはしでもおぼへるといなや、＝荷をおくる国々から便船してのぼる医者や出家衆をみると、詩をつくりかけ、＝たまへ和韻せらるゝ衆あれば、何やら口の内へ「ふんくわんでゑりやんちん」などゝ、ぼちへいふてみて、「是はうたはれぬ」と恥をかせ、＝御客様方買物取次帳といふを、海客買価録と書て、下に朱印をおしておくゆへ、船人衆は、「もつたいたい真言寺の御札さうなが、帳の表紙には何として御かけなされた」とおがむ衆もござるに、その客衆を「無文的の漢」と＝あざける故、次第にさびしう成て、きのどくに御座るが、＝唐音つかふてわが居る日本を文盲な国じやなどゝ高ぶる様なやまひは、たいていの事ではいゑますまい」と、涙をながされける折ふし、夜もやへふけて、＝太郎八かへりしに、間もなく「いねんゆうこういねんちゆん。へついいぢんべついいちん」と、うたふてもどるは倅めならんと、＝「たき問屋のぶんぎいで、唐人ことば聞たふない」としからるれば、「是は唐人口ではござりませぬ。おやち様も長崎へござつてお聞なされてござうじませい」と、口ごたへして寝たるよし。上がたのあきんどがはなしました」と庵原左衛門かたられける。

- ①【かなりがけ】 一通りであるさま。どうかこうにか、の状態。
- ②【称名鉦はり講】 直径一尺程度の鉦「双盤（そうばん）」を打ち鳴らしながら節付け念仏を唱えることを信仰の行とする人々の集まり。 双盤念仏。明応四年（一四九五）、祐崇が京都の真如堂（真正極樂寺）の大衆とともに宮中において引声念仏を修し、その後勅許を得て鎌倉の光明寺に移修したのが双盤念仏の始まりといわれている。 ちなみに、鉦を打つことを「鉦をはる」という。
- ③【大灘屋の入斎】 大灘屋とは屋号か、もしくは海運業を営む店の意味か。 いずれにしても本文からわかるとおり、薪材を扱う船問屋（船宿を兼営）、その店の隠居老人。
- ④【唐音】 中国語の発音。あるいは中国語。
- ⑤【紅屋】 紅（べに）やおしろいなど化粧品を売る店をさす江戸時代の呼称。
- ⑥【そつこでせいゝ】 盆踊り歌の囃しことは。
- ⑦【床髪ゆひたのみてかけがみをかけ】 床髪結とは、江戸時代、簡単な屋台で理髪を業とする移動理髪店。 または、その職人。 髪結床。 かけがみは、付け髪のことか。
- ⑧【床】 人形浄瑠璃の舞台の上手（右手）に設けられた、太夫（たゆう）と三味線弾きが義太夫節を演奏する場所のこと。 あるいは、単に演奏する場所。
- ⑨【座摩の社】 摂津国一之宮の坐摩（いかすり）神社。 現在の大阪市中央区久太郎町四丁目に鎮座。
- ⑩【実体】 まじめで正直なこと。 また、そのさま。 実直。
- ⑪【浄瑠璃の道行かおどりくどき】 道行とは、浄瑠璃・歌舞伎などで、舞踊で表現される相愛の男女の駆け落ち、情死行などの場面。 おどりくどき（踊り口説）とは、おもに盆踊りで歌われる、長編の叙事的な歌。 盆踊りの場合は、主として音頭取（おんどとり）が独唱し、踊り手は囃し言葉を唱和する形式となっている。
- ⑫【荷をおくる国々から便船してのぼる医者や出家衆】 土佐、阿波、熊野などの出発地から運搬船に便乗してやってくる医者や僧侶。
- ⑬【和韻】 漢詩で、他人の詩に和し、同一の韻を用いて詩を作ること。 原作と同一の字を同一の順に用いる次韻、順にこだわらずに用いる用韻、同一の韻に属する他の字を用いる依韻の三体がある。
- ⑭【庵原左衛門】 庵原（蘆原、葦原とも表記）氏は、古代より続いた駿河国の庵原郡の豪族。『吾妻鏡』には、梶原景時の乱において「蘆原小次郎」が梶原六郎・八郎を討ち取ったこと（正治二年「一二〇〇」、そして、建長二年（一二五〇）の閑院の里内裏造宮に従事する雑掌（臨時の工事担当者）の持ち場担当一覧に「蘆原左衛門入道」の名がみえる。

設問

- 問一 ① このエピソード全体を源頼朝に語っている人物は誰ですか？
- ② その源頼朝に語っている人物は、第二段落⑥以降の話を誰から聞きましたか？
それぞれ番号で回答しなさい。

- ① 太郎八 ② 八右衛門 ③ 庵原左衛門 ④ 紅屋の太郎右衛門
- ⑤ 船人衆 ⑥ 上方の商人 ⑦ 称名鉦はり講の仲間たち ⑧ 大灘屋の入斎（隠居入斎老）

問二 第一段落④は、導入部といえる段落で、日本の声楽（歌いもの・語りもの）を古いものから列挙していますが、第二段落以降の話の展開にさほど影響していません。この段落が設けられている意図、あるいはその効果について、この作品全体のコンセプトと関連づけて述べなさい。

問三 傍線部「今でもじやわいな」は、太郎右衛門のどんなことに対するお世辞ですか？ また、このようなお世辞をいわれた太郎右衛門は、どのような行動にできましたか？ 簡潔に述べなさい。

問四 船人衆には理解されにくい芸事・芸能としてあげられているのは次のどれですか？ 番号で回答しなさい。（複数選択可能）

- ① 踊り口説 ② 和韻 ③ 茶の湯 ④ 小謡
- ⑤ 物まね ⑥ 浄瑠璃の道行 ⑦ 和歌 ⑧ 唐音

問五 八右衛門の行動として、正しいものはどれですか？ 番号で答えなさい。

- ① 店の帳簿の表紙には「海客買価録」と中国語風に書き、その意味を理解できない客を「無文的の漢」といつて嘲つ。
- ② 美青年や美女をみかけると「好童子」「好女子」などと声をかけ、交際を申し込む。
- ③ 一緒に和韻をする相手を探している。
- ④ 長崎に行って、中国人に唐音の指導を仰いだこともあった。
- ⑤ 禅寺に通い、僧侶の誦経を聴いて唐音をおぼえた。

問六 この作品から感じ取ることができる、江戸時代中期の庶民における、趣味・教養・習いごと事情について、自由に意見を述べなさい。もちろん、フィクションですから誇張して描かれているのは当然のことですが、ここではその点をあまり考慮なくてよいとします。

令和 7 年度（2025 年度）
京都市立芸術大学大学院音楽研究科修士課程入学試験問題
日本音楽研究専攻 専門科目
筆記試験 B（小論文）

問

音楽・芸能の研究において、「比較」という方法がもっている有効性（メリット）について、具体例を示しながら、説明してください。また「比較」という方法に潜む学問上の危険として、予想できることがあれば、合わせて説明してください。（分量は自由です。）